

ウチナンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義
～ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー【II】～
白水 繁彦*

**A Study of the Ethnic Identity and the Ethnoculturalism of the
Hawaii's Uchinanchu: A Semi-structured Interview with Volunteers
of the Okinawan Festival <II>.**

Shigehiko Shiramizu

〈まえがき〉

本稿は前号No.23所収の「ウチナンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義～ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー～【I】」を前篇とする論攷の後篇である。前篇と後篇の章立ては以下のとおりである。

1. 問題の所在
2. 調査の概要
3. 半構造化インタビューの調査報告
〈No.1〉～〈No.13〉
以上前篇（前号）、以下後篇（本号）
〈No.14〉～〈No.27〉
4. 量的把握
[1] インタビュー相手（28名）の社会的属性
[2] 質問項目への回答
5. 特別編 来賓（沖縄県の町長）へのインタビュー
6. まとめ～ボランティアにみられる民族文化主義
7. 〈付録〉半構造的質問紙

これから、「3. 半構造化インタビューの調査報告」の後半部分以降を掲載する。

〈No.14〉 エドウィン

生年 1944年 男性

世代 三世

HUOAメンバークラブ Urasoe Shijin Kai（浦添市人会）

職業 元軍人

* 駒澤大学名誉教授、駒澤大学GMSラボラトリ研究員

Ph.D., Professor Emeritus, Researcher of GMS Laboratory, Komazawa University

出身 ハワイ
ミチコ (エドウィンの妻)
生年 1948年 女性
世代 三世 嘉手納に住んでいたことあり
職業 主婦
出身 ハワイ
インタビュアー 大浪優紀、鈴木美咲 (当時駒澤大学3年生)
2012年9月2日 ホノルル、カピオラニ公園オキナワン・フェスティバル会場にて
使用言語 英語と日本語

[インタビュー核心部分抜粋]

大浪 (O) オキナワン・フェスティバルに何回くらい参加しましたか？

エドウィン (E) ミチコ (M) 約20回というところかな。

O 何を楽しみにこのお祭りに来ていますか？

EM みんなと集まれることかな。

O ウチナンチュ・スピリットとは何だと思えますか？

E All for one, one for all. これで何でも出来る。

O ウチナンチュの文化の中で最も重要なものはなんだと思いますか？

EM 食べ物。たとえば、(沖縄)ソバ、ティビチー、アンダーギー (沖縄ドーナツ)。

O ティビチーとはなんですか？

M 豚足のこと。豚足スープ。

O 今でも家庭料理としてハワイで食べるのですか？

EM 今でも普通に食べているよ。

O ところで、オキナワンは、民族的にジャパニーズでしょうか、それとも独自の民族集団に属しているのでしょうか？

EM ウチナンチュはウチナンチュ。日本に復帰して、戦後60年経っても、日本人とは言わずにウチナンチュという。例えるとアイヌ民族のようなもの。ウチナンチュは日本で一番強く民族に誇りを持っているのではないかと思う。

O ハワイのオキナワンのコミュニティが抱えている問題は何だと思えますか？

EM たまに難しい人が会長になること。みんなのためではなく、自分のために会長をやる。自分が会長の間は、自分で大きなことをやりたいと思っている。前もそういう人はいたが、今でもいる。本当はクラブのために働いてくれる人がいないといけませんが、自分個人の私欲を持ってきて働く人がいる。みんなボランティアでやっているわけなので、「お前たちあれやれこれやれ」というのは絶対にいけないこと。みんなボランティアがしたくてやっているのに、「これやれ」と言われたらたくさんの人が辞めてしまう。こうやって毎年オキナワン・フェスティバルが出来るのは、ボランティアがいるから。だからall for oneが大切。

日本の場合は、都道府県があまりに多すぎてまともまらない。沖縄は小さい島だからまとも

りやすい。そこが日本の欠点でもある。

観察、感想（大浪優紀）

エドウィンさんはあまり日本語が得意ではないようだった。恥ずかしがりながら質問に答えてくれた。奥さんのミチコさんは沖縄で育ったこともあり、日本語が堪能で、積極的に質問に答えてくれた。最後の方は、私たちの質問用紙を取って、質問用紙を自分で見ながら答えていた。

この御夫妻はオキナワン・フェスティバルに20回ほど参加してきたようで、初期からオキナワン・フェスティバルを陰で支えてきた人物である。オキナワン・フェスティバルについてのこれまでの歴史をよく理解している上で、今回質問に答えてくださったのではないだろうか。

オキナワン・フェスティバルについて何を楽しみにしているかという質問には、「みんなと集まれること」と答えていた。これはこの御夫妻だけではなく、他のインタビューにもこのように答えている方が多かった。このような「お祭り」は、「離れ離れの場所に住んでいても、みんなが同じ場所に集まり再会を果たすという機会を提供する」役割があるのではないかと感じた。

ウチナンチュ・スピリットに関する質問には、「All for one, one for all」と答えてくれた。そして「なんでもできます」とエドウィンさんが答えてくれたように、初めは小さな規模で始まったオキナワン・フェスティバルが、ボランティアたちによってここまで大きなイベントになったのは、「All for one. One for all.」の精神でこのフェスティバルを盛り上げていこう、という精神があったからではないかと思う。

ウチナンチュの文化で最も重要な文化についての質問は、なかなか質問の意味が伝わらなかったが、**food**という答えをあげてくれた。「おそば」とはソーキソバのことなのか、確認するのを忘れてしまった。ティビチーなどは今でも普段から家庭料理として食べているようだ。ここで持った疑問は、沖縄料理が作れる食材などは、ハワイのローカルが通うスーパーなどに売っているかどうか、である。豚足などは、日本のスーパーでも売られているのを見ないので、ハワイの店に行つて確認してみたい。

オキナワンは、日本人か、彼らの自身の民族かという質問には、比較的即答で、「ウチナンチュはウチナンチュ」ということばが返ってきた。やはり20年も前からオキナワン・フェスティバルに参加されている方々なので、民族意識は高いのだろうと感じた。また、日本人ではなくウチナンチュという思いが強かったからこそ、その違いを示そうと、オキナワン・フェスティバルはどんどん大規模になったのではないだろうか。しかし、長年オキナワン・フェスティバルに参加していても、「沖縄より、日本が好き」という考えを持っているような女性（後述のレイラさん）もいるというのは興味深いことである。

ハワイのオキナワン・コミュニティが抱えている問題には、自分の私利私欲のために働くような人が会長を務めることを挙げてくれた。初めは少し話しづらそうだった。オキナワン・フェスティバルは、大勢のボランティアたちが支えている。それは自分がオキナワンだということに対して誇りを持っているから、ボランティアに参加する人があれほどいるのだろう。そしてボランティア精神こそ、「All for one, one for all.」の精神ではないかと思う。しかし、オキナワン・フェスティバルのトップが「自分のために」働くような人であれば、ミチコさんもおっしゃっていたが辞めてしまう人もいるだろう。少し心配になった。

<白水 補記> 筆者が約30年間観察した限りでは、HUOAの会長は多くが「みんなのために」の精神でがんばっているように思う。もちろん、個人差はあるが概ね尊敬できる人が多い。ただ、一般の会員から見て利己的に見える人がいるということは重要である。会長もボランティアだが、一応名誉ある地位である。一方、一般の会員はほとんど黒子同然の地位である。ボランティアで成り立つ組織の場合、リーダーたるものは縁の下の力持ちの士気を高めるための気配り、態度が肝要であることを、この御夫婦の辛口の批評が再認識させてくる。われわれのような「部外者」に対しては「仲間内」の批判を述べないウチナンチュが圧倒的多数のなか、言い辛そうではあったが、ちゃんと述べてくれたということは、インタビュアーである学生たちの雰囲気さがそうさせたのかもしれない。もしそうなら、大したインタビュアーである。アイデンティティに関してはお二人とも「非日系型=オキナワン・アイデンティティ型」に属するといっていよう。

<No.15> レイラ

生年 1932年 女性

世代 二世（両親が小禄出身）（夫はナイチ）

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

職業 会社員（某大手通信会社）

住所 オアフ島

インタビュアー 大浪優紀、鈴木美咲（当時駒澤大学3年生）

2012年9月1日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

大浪（O） オキナワン・フェスティバルには何回くらい参加しましたか。

レイラ（L） たくさん。30年ほど前から。カピオラニ公園で開催するようになる前の、アラモアナで開催した時も参加していたのよ。

O 何を楽しみにこのお祭りに来ているのですか？

L そういうものはないわよ。ボランティアで来ているんだから。

O ウチナンチュ・スピリットとは何だと思えますか。

L みんなにフレンドリーに接すること。友達をたくさん作ること。

O ウチナンチュの文化の中で最も重要なものはなんだと思えますか？たとえばウチナグチ、オキナワン・フード、オキナワン・ダンス・・・

L 沖縄の言葉は話さないわ。私が話すのは日本語と英語だけ。戦争中は日本語を話してはいけなかったのよ。戦争が終わってから日本語学校に通ったの。理由は、日本語を話して仕事をしたかったからよ。18歳の時に一人でアメリカ（本土）に行って働いて、色々なところを見てきたわ。私の母親は沖縄舞踊をやっていたわ。

（質問に対する明確な答えは無かった。）

O オキナワンは、民族的にジャパニーズでしょうか、それとも独自の民族集団に属しているの

でしょうか。

L 分からないわ。

（質問の意図が伝わらなかった可能性がある）

O ハワイのオキナワンのコミュニティが抱えている問題は何だと思いますか？

L 問題はないと思う。みんな楽しくやっているから。

観察、感想（大浪優紀）

レイラさんとは、インタビューをする前に、一緒にアンダーギーの生地を入れる袋にオイルを塗る仕事をしていましたが、何度も「戦争の時、日本語は禁止されていた」というお話と、「日本が好きで、日本語を使う仕事をしたいと思って学校に通っていた。」というお話をされていた。また、大阪に親戚がいて、よく遊びに行くようである。きっと、戦争中に日本語を話せなくなったことや、日本語を学べないことがレイラさんにとって、とても苦痛な経験だったのだと思われる。それほど日本に愛着を持っていたのではないだろうか。このように、日本の話はよくするのだが、あまり沖縄やオキナワンの話は聞かなかった。Okinawan danceについても、レイラさんの母親はやっていたのに、レイラさんはやらなかった。つまり、レイラさんは、「自分はオキナワンだ」ということより、「私はジャパニーズだ」ということに誇りを持っているのではないかと私は考えた。

<白水 補記> アイデンティティに関しては、大浪くんが指摘しているように、レイラはかなり強い日本最良である。自分自身ジャパニーズだと思いたいようなので「日系型=日系人アイデンティティ型」に属すると考えてよいだろう。もしかしたら夫がナイチであるということも関係があるかもしれない（「配偶者影響仮説」）。

<No.16> ブレンダ

生年 1942年

世代 三世 女性（夫はハワイ系）

職業 公務員

HUOAメンバークラブ Urasoe Shijin Kai（浦添市人会）

住所 ホノルル

インタビュアー 佐藤夏美、中井ゆりか（当時駒澤大学2年生）、小此木孝史（特別参加）

2012年9月1日 ホノルル、カピオラニ公園オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表夏美（N） よろしくお願ひします。このフェスティバルには何回くらい来ておられますか？

ブレンダ（B） 10回は来てるわ。最初はアラモアナでやっていたころ。ここのところ毎年来てるわ。

N では最初は1982年ということですか？

- B 最初の年はそうだった。だったらそのころね。
- N この祭りではなにが楽しみですか？
- B (会場内の沖縄物産売店で買った削り節と沖縄ソバの乾麺を見せてくれる。) こういうものが買えるのが楽しいよね。
- N ソバが好きなんですね。
- B ハハハ、そうよ。
- N 私も大好きです。ところでこの祭りのどんなところが好きですか？
- B うーん、どんなところねー。そうね、沖縄から来る演奏者、とくに太鼓が好き。あなたたちも沖縄から来たの？
- N いえ、東京だったり、埼玉だったり。
- B へー、遠いところから来たのね。
- N ところでウチナーンチュ・スピリットというのはどんなものだと思いますか？
- B え、なんだって？
- N ウチナーンチュ・スピリット
- B うーん、なんだろうね。われわれは沖縄音楽が聴きたくて来ているからね。親が死んでもこうして沖縄の音楽を楽しんでいるよ。
- N ウチナーンチュの文化で大切なものはなんだと思いますか？
- B 音楽だね。それにカチャーシー。なんの気遣いもなく、気持ちよく踊れるからね。私は沖縄で行われる世界のウチナーンチュ大会にも行ったことがあるけど、そこ（フィナーレ）でも踊ったからね。
- N ところで、オキナワンはジャパニーズと同じエスニック・グループに属すると思いますか、それとも異なるグループだと思いますか？
- B 両方とも同じようなものじゃないかな。見た目もほんのちょっと違うし、音楽なんかは少し違う感じはするけど、ま、だいたい同じ。(連れてくる二人の幼児を指差して) ほらこの双子のようなものだよ。この子たちは四分の一オキナワンの血が入っているんだよ。
- N 最後に、ここのオキナワン・コミュニティの目立った問題といったものはありますか？
- B オキナワン？
- N コミュニティです。
- B カピオラニ・コミュニティカレッジとオキナワ・センターで太鼓や踊り、音楽の稽古をしています。(こちらの訊きかたが悪かったので、質問の意味が伝わらなかったようだ。申し訳ない事をしたと思う)。

観察、感想 (学生)

ブレンダさんはインタビューした時、双子のお孫さん(5歳)を連れてレジャーシートに座っていた。オキナワン・フェスティバルには毎年、見物しているということであったが、このことから、彼女は長い間オアフ島に住んでいることが想像できた。オキナワン・フェスティバルで、食べることに音楽を聴くことを楽しみにしていると言っていた。その時、レジャーシートの上に置いていた大きなレジ袋の中から削り節とそばを出して見せてくれた。日本語表記だった。インタビュー後、

詳しく聞いたところこれらは会場内のHEIWA DOORIというテントで買ったそうだ。毎回買っていて、ブレンダさんもお孫さんも日本食が好物だという。また、ウチナーンチュ文化については、音楽が大切だと言っていて、カチャーシーというものを知っていた。調べたところ、カチャーシーとは沖縄方言で「かき回す」という意味で、頭上で手を左右に振りながら踊るダンスのことだ。とても楽しそうに話してくれた。加えて、伝統的な沖縄の食べ物を食べることや音楽を聴くことが、本人にとってとても重要なことだということがわかった。オキナワンは民族的に日本人と同じグループであると思う、という彼女の意見には、私はオキナワンであれば自身のグループであると強調するだろう、と仮説を立てていたので驚いた。ブレンダさんは気遣いをするとところなどといった、日本人の性質に重点を置いて考えたのだと思った。そしてクォーターの双子のお孫さんを紹介してくれた。彼女は三世であるため、お孫さんは五世のはずである。最後の質問は、おそらく英語が伝わらず、Okinawan Communityについて発言したのだと、後でレコーダーを聞き直して考えた。インタビュー時は、“今のコミュニティにはダンスと音楽などのパフォーマンス面だけしか強調されていないことが問題だ”と解釈をしてしまったので、その部分が不明確になってしまいとても悔しい。

全体的に振り返ってみて、快くインタビューを引き受けてくれて、ゆっくりはしっかり話してくれたのでインタビューしやすかった。ブレンダさんは、孫をフェスティバルに連れてきたり、沖縄の食べ物を積極的に食べさせているということから、ウチナーンチュ文化を継承させる役割を担っていると感じた。

<白水 補記> ブレンダは、長年オキナワン・フェスティバルを見物には来ているが沖縄の文化や歴史にはあまり関心がない、という多くの一般のオキナワンの代表のような人である。実際、会場にいてもボランティアではない観客にはこうした人は極めて多い。ウチナーンチュといっても沖縄の歴史や文化をいっこうに学ぼうとしない人びとに苛立ちを隠さない若いリーダーもいる（たとえば、白水, 2018, 201-202）。

アイデンティティに関しては彼女は実はあまり深く考えたことはないかもしれない。こういう人は一般に「両方ともほとんど同じだと思うけど」と答えることが多いようだ。彼女は「不明型」もしくは消極的な「多アイデンティティ共存型」に属すると考えてよいだろう。

<No.17> マシュー

生年 1927年

世代 二世 男性（妻は先住ハワイ系）

職業 元砂糖プランテーション労働者（おもに水利関連）

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

住所 オアフ島

インタビュアー 佐藤夏美、中井ゆりか（当時駒澤大学2年生）、小此木孝史（特別参加）

2012年9月1日 ホノルル、カピオラニ公園オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表佐藤 (S) どのくらいこのフェスティバルに参加していますか？

マシュー (M) ここ毎年来ているよ。

S 初めて来たのはいつですか？

M 思い出せないけど、最初のころからだよ。

S このフェスティバルで、何を楽しみにしていますか？

M 友だちと久しぶりに会うことだね。ここに来ると沖縄の感覚がよみがえる感じがするんだよね。

S フェスティバルでお気に入りの部分は何ですか？

M 文化だよ。とくに音楽だよ。それを友だちやウチナンチュたちと一緒に楽しむ。特別の楽しみだよ。

S あなたは、ウチナンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

M 暖かさ、友情、共有すること。お互いに信頼で結ばれている、そんな感じがする。

S ウチナンチュ文化において、何が最も大切なことだと思いますか？

M だから「結びつき」だよ。お互いの信頼。それと、他人に対する歓迎の心かな。暖かい歓迎の心。

S もてなすことですね。

M そう。

S オキナワンは民族的に日本人か、それとも自身の民族的グループに所属するもの、のどちらだと言えると思いますか？

M わたしにとってですけど、ウチナンチュは誇りを持つべきだと思います。言葉もできるといいけど。ウチナーグチ。私は帰米二世で、ウチナーグチがわかる。何年前に沖縄に行ったとき、沖縄はとても日本化している。日本化しすぎていると思ったね。それとアメリカ化もしている。ぼくはハワイや世界がアメリカ文化のようになってしまうのが怖いんだ。それはよくないことだね。とにかく、オキナワンは沖縄文化に誇りを持つべきだね。私は文化を守っているよ。

S ハワイのコミュニティで、目立っている、または未解決の問題は何だと思いますか？

M 慈光園（お寺）だね。ここはもともとウチナンチュの寺だった。今も信徒はウチナンチュが多いけどいろいろな文化活動があるよ。さまざまなプログラムがある。月曜日の夜は沖縄の教授がここで講義をしているんだよ。（こちらの発音が悪いせいか、質問の意味が伝わらなかったようで、たいへん申し訳ないことをしたと反省）。

S あなたは第二次世界大戦の時、兵士でしたか？

M ぼくは朝鮮戦争の兵士だった。

S えーっそうだったんですか？

ご協力いただき、本当にありがとうございます

観察、感想（佐藤夏美）

マシューさんは、今まで私がインタビューした中で初めての二世の方だった。フェスティバルの

舞台を遠くの方から眺めていて、その姿はどこか凛としていた。実は質問をしている途中、スクールが降ってきて、結構雨量は多かった。しかし、マシューさんはインタビューに真剣に答えてくださって、とてもありがたかった。質問したところ、まずこのフェスティバルに毎年参加していて、いつが初めて来た時は覚えていなく、おそらくオキナワン・フェスティバルが始まった頃からだということだ。何を楽しみにしてきているか、という質問では、友達に会ったり、ウチナンチュの気持ちを感じることが出来るということだった。私は、まずその質問をした時点で、ウチナンチュというキーワードが出てきたことに、とてもわくわくした。つまり、ウチナンチュに関するアイデンティティがあるということだと思ったからだ。マシューさんにとって、ウチナンチュ・スピリットを語る際のキーワードは、暖かさ・友情・共有・信頼・おもてなしということであった。このことから、ウチナンチュ・スピリットには、固い結束力と団結力、思いやりの心があるのだと感じた。さらにマシューさんは、オキナワンは言語や文化、オキナワンならではのものに誇りを持つべきだと主張していた。

マシューさんのことで印象的なことは、実際にプランテーション時代、サトウキビ畑で働いていたということと、朝鮮戦争の兵士をしていたということだ。いままでのインタビューの中で、初めて実際に体験した方に話を聞くことができるとも貴重だった。反省点としては、現地で聞き取れない英語が多かったこと、それをレコーダーでもうまく聞き取れなかったこと、そして、居住地が **this island** のどこに住んでいるのか不明確だったことだ。

インタビュー直後にわかったこととしては、私たちがその場を離れる頃に、マシューさんの息子さんと思われる人が、マシューさんのもとに来たということだ。二人は待ち合わせをしていたようで、その後一緒に行動していた。

<白水 補記> マシューはフェスティバルに観客として来ていて、いわゆるボランティアではないが、明快に自分のアイデンティティを語れる人である。こうした観客は比較的珍しい。アイデンティティに関しては、マシューは「非日系型＝オキナワン・アイデンティティ型」に属すると考えてよいであろう。

<No.18> ダーシー

生年 1953年

世代 三世 女性

職業 元保険会社社員

HUOAメンバークラブ Ginowan Shijin Kai (宜野湾市人会：母方が宜野湾出身、父方は中城の久場出身)

住所 ホノルル

インタビュアー 中井ゆりか (当時駒澤大学2年生)

2012年9月1日 ホノルル、カピオラニ公園オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語と日本語

[インタビュー核心部分抜粋]

中井 (N) どのくらいこのフェスティバルに参加していますか？

ダーシー (D) もう 20～30回以上よ。

N 初めて参加したのはいつでしたか？

D 初めからよ。

N このフェスティバルで、何を楽しみにしていますか？

D 友達に会ったり、親戚に会ったりするね。

N フェスティバルでお気に入りの部分は何ですか？

D アンダーギーをつくることよ。(笑う)

N そうなんですか～いいですね。ところで、ウチナンチュ・スピリットとは何だと思えますか？

D みんなで働いたり、その中でお互いを助け合うことだと思うわ。

N ウチナンチュ文化において、何が最も大切なことだと思いますか？

D 食べ物とダンスね。

N オキナワンはエスニック・グループとして日本人だと思いますか、それとも独自のグループに所属するものだと思いますか？

D 独自のエスニック・グループだと思うわね。まず伝統が違うからっていうのもあるけど、沖縄は戦争ととても関係があって、アメリカの支配下にあった沖縄が日本に返還されるなど、独自の歴史があるからね。

(ここで電話がかかってくる)

※ここからインタビュー再スタート

N お忙しいところ、すみません。あなたの視点から、ハワイのコミュニティで、目立っている、または未解決の問題はなんですか？

D 問題は特にないわ。だけど、私たちは皆、一緒にフェスティバルを続けなければならない、沖縄文化を維持発展させなければならないと思うわけ。私には3人のこどもがいるんだけど、その子たちも毎年来てるの。彼らが年をとるにつれて、次第に彼らの子どももここに来なければならないと思う。もし私が子どもたちをつれてこなくて、それから子どもたちも行きたくないとなったら、私も来なくなるし、子どもたちも来なくなって途切れてしまうでしょ。

N なるほどそうですね。ところで、ダーシーさんは宜野湾市人会に属しておられますが、それはお父さんのほうですか、お母さんのほうですか？

D 母方が宜野湾だから宜野湾市人会、父方はKuba Roseikai。私の父のクラブはとても小さいのよ。村みたいな感じ。久場は中城村の一部だったみたい。

N そうなんですか。

お忙しいところをありがとうございました。

観察、感想 (中井ゆりか)

ダーシーさんは、アンダーギーの生地作りの時に、一緒に作業をした女性だった。少しばかりそこで話していて、優しく接してくれた。作業後にインタビューを行った。その時にわかったことは、

35年前は沖縄に住んでいたようだ。このフェスティバルには20～30回ほど来ていて、友達や親戚と会ったりするのを楽しみにしているようだ。中でもアンダーギーを作ることは好きだと語っていた。ウチナーンチュ・スピリットに関しては、みんなで一緒に働いたり、お互いを助け合ったりすることだと答えてくれたので、やはり、人と人とのつながりを大切にしているのだなと感じた。また、ウチナーンチュ文化のなかでは食べ物やオキナワンダンス（琉球舞踊）も重要だと語っていた。アイデンティティにかんしては、オキナワンは独自のグループだと答えられたが、その理由は伝統や歴史が日本と違う点だというのは予想できることだったが、さらに戦争や戦後のことにまで触れられたのには驚いた。また、オキナワン・コミュニティについては、継承面について詳しく説明してくれた。親が連れて行かないと子どもも行かなくなり、そのまた子どもも行かなくなる……という負のスパイラルは、本当に悪影響を及ぼすものだろうなとわたしも共感した。ダーシーさんにインタビューをしてみて、“つながり”というキーワードがとても強く感じられた。電話がよくかかってきていたので、貴重な時間を割いてしまって申し訳なかったが、快くインタビューを引き入れてくれてとても嬉しかったし、なによりも最後に「また会いましょう」と言ってくれたのがとても嬉しかった。感謝したいと思う。

<白水 補記> ダーシーのアイデンティティに関しては「非日系型＝オキナワン・アイデンティティ型」に属すると考えてよいだろう。彼女が戦争に関する沖縄の歴史を視野に入れてアイデンティティについて語っていることは注目に値する。彼女はオキナワン・アイデンティティの確立のみならず、それに基づいたコミュニティ活動を続けていることから民族文化主義（ウチナー文化主義）の同調者のひとりであると思われる。

<No.19> アラン

生年 1951年

世代 三世 男性

職業 録音技師

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

住所 オアフ島

インタビュアー 福原亮平（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日 ホノルル、トマス・ジェファーソン小学校給食キッチン（アンダーギー生地作り会場）

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

福原（F） このフェスティバルには何回出席していますか？

アラン（A） うーん、10回くらいかな。

F 初めはいつですか？

A 多分…199…1992年ころ。

F 何を楽しみにこのフェスティバルに来ていますか？このフェスティバルで好きなのは何です

か？

- A 料理、アンダーギー、それに踊りを見るのが好き。
- F あなたの意見では、ウチナンチュのスピリットとはなんですか？
- A ウチナンチュ・スピリットは…快く一緒に働くこと。
- F ウチナンチュ文化で最も大切なものは？例えば、ウチナーグチ？沖縄料理？
- A 音楽や、舞台芸術だね。音楽とか踊りとか。小説も好きだよ。
- F オキナワンは民族的にジャパニーズですか、それとも独自の民族グループに属していますか？
- A 民族的にジャパニーズだね。
- F ハワイのオキナワン・コミュニティで目立っている、未解決の問題はなんですか？
- A それは文化の維持。沖縄的価値観の維持と発展だね。

観察、感想（福原亮平）

アランさんは、三世ということもあり、日本語が全く話せなかった。ウチナンチュの文化で大切なこととはという質問に対しては、音楽、伝統舞踊、踊りと答えた。沖縄の音楽や踊りは、ハワイだけでなく、日本の文化とも異なるものである。なので、他にはない唯一の文化である沖縄の音楽や踊りに対して誇りを持ち、ウチナンチュ文化の中で最も大切だと答えたと考えられる。しかし、オキナワンは民族的に日本人ですか、それとも独自の民族グループに属していますかという質問に対しては、民族的に日本人であると答えた。沖縄の文化は独自のものであるが、彼の中では、オキナワンは日本人の中の一つであると考えているのだ。最後の質問のハワイのオキナワン・コミュニティで目立っている、未解決の問題はなんですかに対し、伝統的な価値の維持や前進と答えた。やはり、沖縄の伝統的な文化の維持に関しては今後の問題であると考えている様子である。若い世代にどのように伝統文化を伝え、維持していくかが課題となっているのだ。

アランさんは、沖縄の文化は独自のものであり、彼にとってもその文化に接することは本当に大切であると考えている。しかし、今後そのような文化をどのように維持していくかが問題であり、その問題を解決しなければならないと考えているようだ。

<白水 補記> アランはアンダーギーの生地作りを10年余りも手伝い、沖縄文化に対する愛着も強い。それでも民族的にジャパニーズだと答えている。そのまま受け取れば「日系人アイデンティティ型」に属するといえようが、その実際の行動から推して「多アイデンティティ共在型」である可能性が高い。

<No.20> カネシロ

生年 1974年

世代 四世 男性（本人はオキナワンとジャパニーズの混血だという）

職業 高校教師

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

住所 オアフ島

インタビュアー 福原亮平（当時駒澤大学2年生）

2012年9月2日 於ホノルル、カピオラニ公園オキナワン・フェスティバル会場

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

福原（F） このフェスティバルには何回参加していますか？

カネシロ（K） 高校卒業してから始めた。95年。15年。約15年。

F 初めてはいつですか？

K あー、多分…大学がちょっと始まってから…おそらく95年。高校を卒業してから。祖母が本当にアクティブだった。彼女がこれをやっていて、来るしかなかったんだよ（笑）ま、そうじゃなくても、彼女が行くって言うなら、OKと言っていたけどね。

F なるほど。何を楽しみにこのフェスティバルに来ていますか？このフェスティバルで好きなのは何ですか？…例えば、アンダーギー揚げだったり、生地作りだったり。

K みんなに会うこと。オキナワン・フェスティバルは楽しいよ。だけど、正直言って、アンダーギーの生地作りは好きじゃない（笑）。沖縄のことは、ちょっとずつ学んで、毎年、ちょっとずつ自分たちの歴史を学んで。たとえば屋号だったり、ミドルネームの由来だったり、毎年、沖縄の文化についてちょっとずつ学んでいる。

F ウチナーンチュのスピリットはなんだと思いますか？

K あー…多くの文化を受け入れる寛容さ。ハワイの精神に似てるよね。

F ウチナーンチュ文化で最も大切なものは？例えば、ウチナーグチ？沖縄料理？

K 個人的に興味があるのは言葉だね。私たちは、「方言」と呼ばれるものをいくつか持っている。私が見つけたのは、本当の沖縄の言語ではなかった。正しいウチナーグチを見つけて、…試す、伝統的な言語に戻してみる。沖縄の伝統的な言語を学ぶ。でも本当に難しい。何故なら、完全に言語を知っている人はいなくて、インターネットのスカイプ経由で沖縄人と話すと、グループによって違うことをいう。私は本当の言葉を理解したいんだけどね。

F オキナワンは民族的にジャパニーズですか、それとも独自の民族グループに属していますか？

K あー、（しばらく沈黙）沖縄の言語は中国語や日本語に似ているという人がいるが、私はそうではないと思う。でも私にはよくわからない。

F あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立っている、未解決の問題はなんですか？

K 言語、言語だと思う。そして、次に私たちのクラブであるOroku。Oroku。私たちは若いメンバーがいない。若い世代は、興味関心が異なっている。私たちOrokuファミリーは、だんだん小さくなっている。若い世代は、参加することの意味がわからないし、また、いろいろと忙しいからね。

観察、感想（福原亮平）

カネシロさんは、地元で高校の先生をしている。日本人と沖縄人のハーフであるが、日本語は全

く話せなかった。

このフェスティバルには何回出席していますかという質問では、はっきりと覚えていないようで、およそ15回と答えていた。彼が高校を卒業し、大学生になって少ししたら参加をしたという。彼の祖母が積極的にクラブの活動に参加し、彼もその影響で参加を決めたようだ。何を楽しみにこのフェスティバルに来ていますかという質問に対しては、みんなに会うことと答えた。ここでは1年ごとにしか会わない人もいたので、その人たちと会うことが楽しみであると考えられる。しかし、アンダーギーの生地作りは好きではないという。おそらく、アンダーギーを揚げる作業などに比べて重労働であるからだと考えられる。また、自分が沖縄人であるという境遇をこのフェスティバルを通して高齢者から教えてもらい、学びたいと考えている。ウチナーンチュ文化で最も大切なものという質問では、個人的には言語だという。沖縄にはいわゆる「方言」というものが存在するが、彼が見つけたのは、本当の沖縄の言語ではなかったという。彼がスカイプをした時も理解できなかったと話している。そこで、彼は言語を学び、理解したいと考えている。ウチナーンチュ文化は若い世代が増えていくごとに、だんだん継承していく人が少なくなっているから、彼はその文化が無くなってしまふことを恐れて、「言語」に興味を持ったと思われる。オキナワンは民族的に日本人ですか、それとも独自の民族グループに属していますかという質問では、沖縄の言語は、中国語や日本語に似ているという議論があったが、彼は沖縄の言語はそれらとは違うと考えている。つまり、オキナワンは独自の民族グループであると考えている。最後にハワイのオキナワン・コミュニティで目立っている、未解決の問題は？という問いに対して、ほとんど間髪入れずに、「言語」という答えが返って来た。それは先程から話しているように、彼にとって沖縄の文化の一つである言語が無くなるのを危惧しているからである。次に問題としているのは、彼らのクラブが、どんどん小さくなっていることだ。若い世代が年々減っているのは大きな問題であり、若い世代が減ることにより、将来のクラブの存続に影響を及ぼしている。それはハワイにあるそれぞれのクラブにも同様のことが言えるのではないか。

彼は祖母に連れられてクラブに参加したが、今ではクラブの活動に積極的に参加している。それは単にクラブの人々と会えるという理由だけではなく、言語や自分の境遇をそこから学ぶことができるからだ。しかしながら、若い世代が減っていきクラブが小さくなってしまふという大きな問題にも直面している。彼と同年代、そしてそれ以下の世代がどのようにその問題に取り組んで行くか。今後のクラブの存続がかかっている。

<白水 補記> 上記の学生の記述中、オキナワンは民族的に日本人か、それとも独自の民族グループに属しているかという質問に対し、彼は「沖縄の言語は、中国語や日本語に似ているという議論がある」ということを知ったうえで、沖縄の言語はそれらとは違うと考えている。つまり、「オキナワンは独自の民族グループであると考えている」という福原くんの分析は非常に興味深い。おそらくカネシロ自身「非日系型=オキナワン・アイデンティティ型」、もしくは「多アイデンティティ共在型」に属すると考えられる。その傍証として自分をジャパニーズとオキナワンの「混血」と明言するからである。自分をジャパニーズだと自己規定する人は、一般に、そうした組み合わせを「混血」とはいわない。彼もまた、オキナワンなのだからウチナーグチを学ぶべきだ、と考えていることから推してウチナー文化主義の同調者であると思われる。

なお、琉球語は文法の近さなどからわかるように明らかに日本語と同じ系統に属するが、HUOAなどでは中国語との類縁性を主張する人びとがいることは興味深い。

<No.21> サヨコ

生年1938年 女性

世代 二世

HUOAメンバークラブ Ginowan Shijin Kai（宜野湾市人会）

職業 元学校教師

出身 ハワイ

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表哲央(T) このフェスティバルに何回参加していますか？初めて参加したのはいつですか？

サヨコ(S) 何年も前から。もう20年くらいかな。

T このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

S ボランティアのみんなと一緒に働くことね。

T ウチナーンチュスピリッツとは何だと思いますか？

S みなぎ助け合うことまた沖縄とつながること。

T ウチナーンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

S よくわからないけど、一種の感情かな。

T オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに属すると思いますか？

S ジャパニーズね。

T あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は何かと思いますか？

S 他の文化に溶け込んでしまって違いがなくなることが心配ね。

<No.22> ジョーン

生年1952年 女性

世代 三世

HUOAメンバークラブ Urasoe Shijin Kai（浦添市人会）とGinowan Shijin Kai（宜野湾市人会）

職業 元学校教師

出身 ホノルル

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表哲央(T) このフェスティバルに何回参加してますか？初めて参加したのはいつですか？

ジョーン(J) 10回くらいかな。初めて来たのはもう20年くらい前だと思うわ。

T このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

J 音楽ね。音楽を楽しむこと。

T ウチナーンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

J ウチナーンチュ音楽とショーに表れているわ。

T ウチナーンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

J 三線とウチナーンチュ・ミュージック。

T オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに属すると思いますか？

J 独自のグループね。

T あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は何かと思いますか？

J 若い人にウチナーンチュ・アイデンティティがないことです。

<No.23> イベット

生年 1964年 女性

世代 三世

HUOAメンバークラブ Hawaii Shuri-Naha Club (ハワイ首里那覇クラブ)

職業 主婦

出身 ハワイ

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう (当時駒澤大学2年生)

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表哲央(T) このフェスティバルに何回参加してますか？初めて参加したのはいつですか？

イベット(Y) 25回目だから25年前からね。

T このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

Y 友達と会って話すことです。

T ウチナーンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

Y よくわからないけど、とてもよいものであることは確かね。

T ウチナーンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

Y それは連帯意識じゃないかしら。

T オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに属すると思いますか？

Y 独自のグループだと思うわ。

T あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は
何だと思いますか？

Y 若い人たちに連帯意識がないことね。

<No.24> フローラ

生年 1932年 女性

世代 二世

HUOAメンバークラブ Ginowan Shijin Kai（宜野湾市人会）

職業 不詳

出身 ハワイ

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表哲央(T) このフェスティバルに何回参加していますか？初めて参加したのはいつですか？

フローラ(F) ずっと昔ね。30回くらい来てるんじゃないかな。

T このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

F 音楽、ダンス、フード、、、全部かな。

T ウチナーンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

F 良いクラブやグループばかりでみんなが助け合って幸せになっているところ。

T ウチナーンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

F みんなが幸せなこと、これが一番ね。

T オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに
属すると思いますか？

F 独自のグループね。

T あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は
何だと思いますか？

F みんな幸せだから特に思いつきません。

<No.25> ダン

生年 1947年 男性

世代 三世

HUOAメンバークラブ 加入していないが沖縄系

職業 公務員

出身 ハワイ

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表哲央(T) このフェスティバルに何回参加していますか？初めて参加したのはいつですか？

ダン(D) 1999年が初めてで、それから時々来ている。

T このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

D アンダーギーだよ。

T ウチナンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

D そりゃなんといってもフード、オキナワン・フード。

T ウチナンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

D 先祖だろうね。

T オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに属すると思いますか？

D うーん・・・ほくが思うに独自のグループだろうね。

T あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は何かと思いますか？

D 文化を受け継いでいくこと。これが難しいよね。

<No.26> ジャネット

生年 1951年 女性

世代 三世

HUOAメンバークラブ 加入しているが聞き漏らした

職業 元教師

出身 ハワイ

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表哲央(T) このフェスティバルに何回参加していますか？初めて参加したのはいつですか？

ジャネット(J) 2006年がはじめて。それから大体毎回来ています。

T このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

J アンダーギー作りのボランティアと会うことね。

T ウチナンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

J よくわからないわ。

T ウチナンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

J おもてなしの心だと思うわ。

T オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに

属すると思いますか？

J 独自のグループだと思うわ。

T あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は
何だと思いますか？

J 上の世代はHUOAのボランティア活動に精力的だけど、若い世代がそうではないこと。

<No.27> テリー

生年 1938年 男性

世代 2.5世（父方から三世、母方から二世）

HUOAメンバークラブ Gaza Yonagusuku Club（我謝・与那城同志会）

職業 元会社員

出身 ホノルル

インタビュアー 小川哲央、高山千尋、篠原ゆう（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日、2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

学生代表千尋(C) このフェスティバルに何回参加してますか？初めて参加したのはいつですか？

テリー (T) 30回目だから30年前からだね。

C このフェスティバルは何を楽しみに来ていますか？一番好きな部分はどこですか？

T 沖縄から来た芸能人の舞台が楽しみ。

C ウチナーンチュ・スピリットとは何だと思いますか？

T 社交性、つまりだれとでも親しくなることじゃないかな。

C ウチナーンチュ文化で一番重要なのは何だと思いますか？

T 琉球漆器だと思うな。

C オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに
属すると思いますか？

T 独自のグループだろうね。

C あなたの考えでは、ハワイのオキナワン・コミュニティで目立った問題や改善すべき問題は
何だと思いますか？

T 言葉が失われていくことだね。（ウチナーグチのことか）

観察、感想（小川哲央）

各質問の答えはそれぞれあったが結局言いたいことは同じであると感じた。それは人とのつながりが大事で、毎年ここで友人に会えるのが楽しみであるということ、そしてこのつながりをこのフェスティバルで作ってきた人たちの次を受け継ぐ若者が少ないことである。この話を聞いてインタビューの合間に周りを見渡してみた。小さい子連れの来場者は多くいた。しかし私たちと同世代の方が非常に少ないという印象を受けた。

<白水 補記> インタビューを実施したこの班はたいへん効率よく調査を実施した。インタビュー相手の数は一番多かった。それだけに、ほかの学生に比べ、インタビュー相手一人にかかる時間が短かったようで、その分、回答がシンプルになっている。このグループのインタビューで気になるのは「オキナワンはジャパニーズに属すると思いますか？それとも独自のエスニック・グループに属すると思いますか？」という問に対する回答である。圧倒的多数が「独自のグループ」であると答えた、としている。つまり回答者の多くが「非日系型＝オキナワン・アイデンティティ型」に属することになる。これは他の調査班や筆者のこれまでの調査と比較しても非常に高い比率である。この差異は、ここで採られた半構造化インタビュー法と関係があるかもしれない。この方式では、質問も相手に応じて多少の改変が許されるし、回答も自由回答方式なので、回答者が語った言葉をすべて記載できればよいが、回答者のさまざまな文言のうち、ある部分だけを切り取って記載する場合に若干のズレが生じることがある。もしかしたら、質問の仕方と、回答記載の仕方、この両方の若干の違いで、このような差異が生じたのかもしれない。

4. 量的把握 ボランティアのウチナアンチュ意識：学生によるインタビュー調査

これまで記述してきたように、この調査はその方法が質的調査（半構造化インタビュー）なので、インタビュー相手の回答は本人のことばで綴られている。したがって実際の質疑応答がメインの報告であるが、それとは別に、どのような人びとへのインタビューなのか、どのような質問にどのような回答が寄せられたのか、概略を知りたい読者のために集計を試みた。なお、インタビュー相手の自由な回答を筆者が独自にポストコーディング（回答を趣旨によって分類すること）したものであることをお断りしておきたい。また、ここに掲示したインタビューは27票であるが、回答者は一組の夫婦（No.14 エドウィンとミチコ）を含み28名であった。

< >は筆者による解説、考察である。

[1] インタビュー相手（28名）の社会的属性

(1) 男女比

男：9、女：19

<ボランティアの作業現場には実際に女性が多いがこれほどの差ではない。調査相手の選定に際し、スノーボールメソッドを用いた調査員（ゼミの学生）が多かったために、女性が女性を紹介してくれるという循環が起きたと思われる>

(2) 世代

二世：6、三世：17、四世：4、その他：1

<実際に作業現場では三世が多い。なお、この場合のその他の1人は戦後の移民である>

(3) 年齢分布

30代以下：0、30代：2、40代：2、50代：1、60代：13、70代：6、80代：4

<三世が多いので60代、70代にピークが来る。実際は30代以下にもボランティアはいるし、

50代ももう少し多いと思われる>

(4) エスニシティ背景

沖縄系：25、ナイチ系：1、多民族系（沖縄系との混血）：2

<混血も含めると28名中27名が沖縄系ということになるが、実際はボランティア全体ではナイチ系を含め非沖縄系が10%以上いると思われる。上記ナイチ系1名は夫が沖縄系である>

(5) 配偶者エスニシティ背景

沖縄系：3、ナイチ系：5、ハワイ系：2、不明：18

<もともと質問紙にない項目なので、調査者が任意に聴取したり、回答者本人が語ったもの。三世以降は沖縄系以外との結婚率が高い>

(6) HUOAメンバークラブへの加入

加入：25、非加入：2、不明：1

<インタビュー相手の28名のうち、非加入の2名はボランティアではなく一般の見物客である可能性が高い>

(7) 職業分布

公務員：12（教師5）、会社員：8、その他：7、不明：1

<公務員、なかでも公立学校教師が多い。年齢的にみて、この28名の7割以上が退職者である可能性が高い。8割以上がいわゆるミドルクラスである。一般に日系社会や沖縄系社会には公務員、とくに学校教師が多いといわれるが、ボランティアの中核をかれらが占めるといふ事実は興味深い。社会学的な検討に値することである>

(8) オキナワン・フェスティバルへの参加回数

5回以下：3、6-10回：3、11-15回：8、16-20回：4、21-25回：4、26回以上：6

<約8割が10回以上の参加である点に注目したい。アンダーギー作りなど作業現場のボランティアは連続して参加することが多いことを物語っている。必然的に高齢化し、後継問題が発生する>

(9) オキナワン・フェスティバルへの初参加の年

1980年代：10、1990年代：12、2000年代：5、2010年代：1

<上記の回数と関連する。1990年代以前に初参加した人が8割を占める。オキナワン・フェスティバルの創始は1982年。発足当時から来ている人も2割以上いる>

[2] 質問項目への回答

(10) オキナワン・フェスティバルの楽しみ、お気に入り？（複数回答）

1) 人に会う楽しみ 12

友人、知人、家族・親族、ボランティア仲間と年に1回、新しい出会い：10
協働ぶりを見る：2

2) 舞台・歌舞音楽を楽しむ 8

3) アンダーギー作りなどボランティア作業を楽しむ 4

4) 食べ物（オキナワン・フードなど）を食べる楽しみ 2

5) その他 3

沖縄文化を学ぶ、盆ダンス、カルチュラル・テントでの記念撮影 各1

<じつは、このフェスティバルを年に1度のリユニオン (reunion) と決めている人びとは非常に多い。他島や米本土に離れて住んでいる家族や親族、友人たちがこの機会に集まるのだ。そのため、会場であるカピオラニ公園の近くのホテルはかれらグループの予約で早くから満室状態になるほどであった。なお、アンダーギー作りなどを楽しむという回答があるのは、作業現場でインタビューした調査員 (学生) が多いことを物語っている>

(11) ウチナーンチュ・スピリットとは? (複数回答)

1) 協力・協働 15

協働・協働精神・助け合い: 10

相互扶助・他者のため働く: 3

共有 (分かち合い): 2

2) 友情・隣人愛・博愛・寛容 7

3) 勤勉・頑張り 3

4) その他 4

出会い、調和、ハッピー、オキナワン・フード 各1

<協力・協働・相互扶助はハワイのウチナーンチュの合言葉のようにになっている。こうした社会関係に関する徳目の背景にある、その精神である友情・隣人愛・博愛・寛容を合わせれば全回答の約8割を占める。ここに上がった回答30のほとんどが、HUOAの歴代会長たちが標語に掲げてきたウチナーグチによる金言・徳目とよく一致する。すなわち、「ユイマール」(結まわる=相互扶助)、「イチャリバチョーディ」(行き会えば兄弟姉妹)「ヤーニンジュ」(家族のような付き合い・繋がり)、「シケヤチョーディ」(世界は兄弟姉妹)、「チバヤピラ、チバリヨー」(頑張りよう)などという言葉である。ということは、会長のこうした呼びかけが人びとの間に浸透したとも解釈できるし、人びとの心にあった徳目を会長たちがうまくすくい上げたとも解釈できる。いずれにせよ年配の会員たちが中心とはいえ、かれらは一致して、助け合いの心、分かち合いの心がウチナーンチュたる者の精神なのだと思っているということがわかる貴重な証拠だといえよう。ある意味興味深いのは、あれだけ会長たちが「ウチナーグチ」で標語化したのに(白水,2018,76-81)、誰一人ウチナーグチでの標語を挙げず、cooperation、sharing、mutual aid、tolerance、open mindedness、hard workingといった一般的な英語に翻訳された語句で表されたことである。その理由を考えてみよう。回答者のなかには、知っているウチナーグチもあるが口に出していうほどの自信はない、という人もいたかもしれないし、調査者が日本(東京の大学)から来た若い学生なのでウチナーグチで回答しても理解してもらえないと思った人もいたかもしれない。筆者とハワイのウチナーンチュとの日頃の付き合いのなかでは、ユイマール、イチャリバチョーディ、ニフェーデービル(ありがとう)といった簡単なウチナーグチはしばしば耳にするところである>

(12) ウチナーンチュの文化で最も重要なものは？

- 1) 沖縄芸能 7
舞踊、音楽など
- 2) 協力・相互扶助 5
連帯、結びつきなど
- 3) 先祖・家族・子育て 3
- 4) 文化の継承全般 2
- 5) オキナワン・フード（沖縄料理）2
- 6) その他 7
村人会ピクニック、誇り、ウチナーグチ、おもてなしの心、ウチナーンチュ・スピリット、琉球漆器 各1

<芸能、相互扶助という徳目、家族愛・先祖供養、フード（沖縄料理）、この4点がウチナーンチュの文化の4大要素とってよいかもしいない>

(13) <エスニック・アイデンティティ>

- 1) オキナワンは独自のエスニック・グループ 15
- 2) オキナワンはジャパニーズ 9
- 3) ジャパニーズとオキナワンはほとんど同じ 2
- 4) アメリカンでありジャパニーズでありオキナワン 1
- 5) 不明 1

合計28人（うち沖縄系25人、ナイチ系1人、沖縄と他民族混血2人）

<この五つのカテゴリーは筆者のポストコーディングによる。なかには、明確な表現をしない回答者の心中を忖度して文脈から筆者が判定したものもある。>

(1)の「オキナワンは独自のエスニック・グループ（非日系型＝オキナワン・アイデンティティ型）」というカテゴリーには「どちらかといえばそう思う」といった、やや消極的な賛成派も含まれている。いずれにせよ、回答者28人中27人が沖縄系の子孫であることに照らせば、「非日系型」が約5割を占めるといえるのは少ないように感じるかたもおられるかもしれない。しかし、つい1970年代くらいまでは、ほとんどの人がウチナーンチュは「ジャパニーズ」だと思っていた（「日系型＝日系人アイデンティティ型」）ことを思えば大きな変化といわざるを得ない。なお、筆者の30年におよぶ観察によれば、この（「非日系型」が）5割という「高率」の理由は、第1に質問者の英語表現上の問題によると思われる。つまり調査相手に質問意図をうまく伝えられなかった可能性がある。なぜなら、ある班だけが目立って「非日系型」の回答が多いからである。その分を差し引けば「非日系型」は3割程度になるかもしれない。それでも1980年代を知っている筆者からみれば高率である。その理由を考えるに、回答者の多くが村人会活動や県人会活動に長年勤しんできた人たちによって占められているためであると考えられる。したがって、市中で大量調査すれば、出自を沖縄とする人びとの多くが、自信無げに「ジャパニーズだと思う」もしくは、正直に「わからない」と答えると思われる。しかし、「オキナワン」は「ジャパニーズ」とは別のエスニック・グループであると主張する人は確かに増えている。このことは筆者も実感している。これは県人会や村人会とい

う「ウチナー文化主義」の旗振り役（変容エージェント）やハワイ大学関係者等による「教育」の成果でもあろう。なお、年配の人ほどウチナーンチュは「ジャパニーズである」（「日系型」）と答える人が多いという傾向にあるのは、若い頃そのように教えられていたという事実と符合するであろう。なお、「オキナワンとジャパニーズは同じ」「自分はアメリカンでありジャパニーズでありオキナワンである」という回答が3票あるが、これは「多アイデンティティ共在型」と考えてよいだろう。拙著『海外ウチナーンチュ活動家の誕生』で紹介したヘンリーも「多アイデンティティ共在型」といいよいアイデンティティをもっていた。ボランティア活動家のかかりのんびりにとってもそのホンネはこのあたりにあるのではないかというのが筆者の当面の仮説である）

(14) ハワイのオキナワン・コミュニティにおいて特に重要かつ懸案となっている問題は？

- 1) 次世代（若い世代）に対する不安、心配なこと 12
文化の維持継承、ボランティアが減少している等
- 2) コミュニティ全体で不安で心配なこと 7
文化の維持継承、アメリカ化の進行、他の文化に溶解される、言葉（ウチナーグチ）が衰退する
- 3) 問題なし、よくやっている 2
他のエスニック・グループを指導したりして助けている
- 4) その他 7
日沖関係勉強中、時折利己的なリーダーが選ばれる、不明、わからない

< (1) と (2) 合わせて、文化の維持継承に不安を持つ人が8割を占めるのは、回答者の多くが年配であること、さらに現場作業（ほとんどがきつい作業である）のボランティアが確実に高齢化し、次の世代のボランティアのリクルートに苦勞する現実をよく知っているからであると思われる。ともあれ、ウチナーンチュならばボランティアに来るのは当然なのに（来てしかるべきなのに）というニュアンスが含まれていると考えればかれらもまた民族文化主義（ウチナー文化主義）の同調者ということになる>

5. 特別編：来賓（沖縄県の町長）へのインタビュー

インタビュー結果収録の最後に、特別編として、沖縄から会場に訪れていた来賓（町長）二人へのインタビュー結果を掲載する。このインタビューを敢行した学生によれば、フェスティバルやハワイの沖縄文化は沖縄の人からはどうみえているか知りたくて実施した由である。両氏はいわば公人であるため、実名で公表させていただくことをお許しいただきたい。お忙しいところを親切に対応いただいたことに対し、学生とともに深く感謝申し上げます。

當山氏（当時 嘉手納町長）、野国氏（当時 北谷町長）

インタビュアー：中西亜弥子（当時 駒澤大学2年生）

2012年9月2日 於：オキナワン・フェスティバル 舞台前

使用言語 日本語

中西（AN） はじめまして、私は東京の駒澤大学でウチナンチュの文化について研究をしている中西亜弥子と申します、よろしくお願いたします。

當山（T） どうしてまたウチナンチュの文化を研究しているの？

AN ゼミの先生が研究をしてらっしゃってその影響を受けて興味を持ったんです。まず今回のお祭りには何を楽しみに、何をしにいらっしゃいましたか？

T 私は嘉手納町長で、野国さんは北谷町長なんですが、こちらの北谷町の町人会からの招待を受けて参りました。で、二日間にわたって沖縄の伝統芸能や、舞台が披露されるということを知り、どういう状況なのか、交流も含めて知りたくて、参りました。楽しみにして参りました。

AN じゃあこちらのお祭りに来られたのは初めてですか？

T 野国町長は二度目、僕ははじめてですね。

AN （野国氏に向けて）はじめにいらっしゃったのはいつごろですか？

野国（N） 10年まえですね。フェスティバルの20周年のとき。10年まえはもうちょっと規模的には小さかったのかな、これは毎年開催されているようですので、毎年毎年発展してきて、いまやもう二日間で7万人ぐらいのみなさんがおいでになると聞いています。嘉手納と北谷の町出身者がいま700名ほどここにいらっしゃると、一世、二世、三世、四世ということですけども、今回はこの皆さんとの交流も目的にしています。それから、嘉手納も北谷も子供たちの短期留学的なものをしようと今探っているんですよ。来年以降ぜひ中学生や高校生をこっちに連れて来て、交流も語学の勉強もしてもらいたいというのがひとつ。そしてやはり、今、沖縄も観光産業を重要視していますので、ハワイの観光というものも学んで次の事業に、町の事業として活かしていきたいと思っています。そしてなによりも、我々が誇りに思うのは沖縄県人会として、北谷町、嘉手納町出身のみなさんがこの地で、ご苦労されたとは思いますが、頑張っておられてね、発展している。こういうことも子供たちが交流することによっていろいろと学んで視野を広げてもらいたいなと、まあこういう風に思っています。

AN ところで、ウチナンチュのスピリット、どういうものが沖縄の精神だと思っていらっしゃいますか？

T やっぱりですね、真面目さ。それから、どちらかといえば、おとなしくて派手さはないんだけれどもやっぱり忍耐強さ。努力家なんでしょうね。かなり苦労したという話は聞いてますけれども。それと相互扶助ですね。

AN おたがいに助け合っということですかね。

T そうそうそう。だからそれで、苦労した時代を克服してきたっていう節があると思うんです、それであとやっぱり文化が豊かだということですね、これでつながっている。

AN たしかに、この舞台だけでもたくさんありますもんね。

T このように、二日間にわたって行われてるのなんて沖縄でもないです。

N やっぱりね沖縄の伝統文化ね。そしてね、向こうの伝統文化をこっちに持ってきてちゃん

と残してるんですね、三線とか太鼓とか、こういったこと。今は獅子舞とかね、こちらの側でいろんな種類のシーサーの顔、あれを見てもね、えー、こっちのほうがたくさんだなど。あちこちから取り寄せているなど。一番文化を大事にしているなあとこの地でね。「いちやりばちよーでい」という、出会えばみな兄弟という精神。それから「ゆいまーる」。さっきの相互扶助のことね。

AN 先ほど、沖縄の文化がハワイで継承されているという風におっしゃってたんですけど、それはハワイに来たことでなにか変わったな、ハワイに来たことでなにか変容してるなっていう部分は見受けられますか？

N 苦しいときとかね、そういう時に三線を持ってきて三線を奏でて歌うことによって苦しさもまた乗り越えていこうという気概になったんじゃないかなあとと思いますけどね。

T あと、地元にいるといつでも聞ける状態でしょう、で、国外に出て初めて故郷の文化というものに、逆に愛着をもつという、やっぱりそれを続けてみたい、習ってみたいというのから始まる。ですからいろんなグループがあって、稽古している。だから、今日はそれらの発表会だと思うんですね。それから、こんなにもりだくさんの沖縄の伝統芸能、文化の舞台がこれだけ盛りだくさん、二日間にわたってというのは沖縄ではないです。

AN じゃあやっぱり、沖縄を離れたからこそ？

T と、思いますね。

N あとやっぱり、工夫するという意味では、^{きょうゆうかい}郷友会、つまり村人会、町人会の役割が大きいんですね。こういう形のものを作ってふるさととの繋がりというものを絶やさないようにしようというものだと思います。戦後、いまから67年前、非常に苦しい時期にハワイから故郷を応援しようということで、いろんなもの、たとえばブタを550頭送ってそれを沖縄で繁殖させて、食物、肉を作り出していこう。沖縄ではもう何もかも全滅でしたから、いろんな面で苦しい時代に、みなさんも苦しかったでしょうけども、ふるさとを思う気持ちでいろいろと送ってもらった。いうこういうつながりがあるって、今回はたまたま嘉手納町と北谷町と一緒にハワイへやってきたというのも縁ですよ。

T もともとは一緒の村なんです。基地ができたために分断されてしまって、分村したんです。だからここハワイでは、一緒の町人会としてやってるんです。分村する前にこられた方が多いので。

AN もう一つお聞かせください。今ハワイの沖縄社会では私はジャパニーズだっていう方と、私はウチナンチュだという方とってらっしゃる方がいるんですけれども、どちらの方が、強いんでしょうね。

T やっぱりこの人は、ウチナンチュという、沖縄の出身だ、という意識が強いんじゃないでしょうかね。まあトータル的にいえば当然日本人ではあるんだけど。このように一県人会としてまとまって、この規模のお祭りができるというのは、やはり、ウチナーというこだわりもたぶんあると思うんです。ですから、ウチナーの方言、シマコトバ（ウチナーグチを含む沖縄各地の言語のこと）というもの、これを大切にするわけです。伝統文化を大切にすること。まあこれはそれぞれ各県の県人会にもあると思いますけれども、ウチナンチュは特にこれが強いんじゃないでしょうかね。

- AN だからこそこのお祭りができるんですね？
- T それとあとやっぱり、文化が豊富だったと思うんですよ。これでしか繋がれない。仕事とか日常の付き合いでも確かに集まれるかもしれないけど、文化は、より絆を強めていくということです。
- AN では、その文化の中でなにが特に人の心の支えになってたりとか、大切なんですか？
- T やっぱり芸能でしょうねえ。仕事だけで生活が潤うわけじゃないです。要するに精神的に潤いをあたえてくれるもの、それが芸能、音楽、舞踊、要するに趣味の世界ですね。これがずーっと継承されていく、その三味線なら三味線を通してこれだけのことができるわけですよ。やっぱりこれが（人びとやコミュニティを）基本的にはつなげていくんじゃないかと思いますね。
- AN ではあともう一つお願いします。沖縄からハワイに移住してきて何世代も経ち、またその間、他の民族、人種のかたとも結婚して、どんどん沖縄の血が薄くなっているという側面もあり、今後沖縄の文化をどう継承していくかっていうのが問題になっているということ結構耳にするんですけど、それは実際にあるなって感じましたか？
- T そう感じないですね。僕らここに来て3日目ですが、三世、四世になっていくともうほとんど言葉も通じなくなってくるし、薄れていくということは当然あると思います。しかし、常に村人会、県人会の付き合いされており、そのためにこういうこと（オキナワン・フェスティバル）をやっているんだらうと。今の若い皆さんに支持されるような、進化を遂げてきているんだと思うんです。昨日から見ていますと、いろんな若者もできるように音楽、踊りなど様々な文化が徐々に徐々にハワイにきてまた進化してきているのかなと思いますね。そのことによって新たな芸も受け継がれていくんじゃないかなと思いますけどね。沖縄では世界のウチナーンチュ大会っていうのをやってるんですよ。ハワイだけでなく、世界に移民として行ってるから、たくさんいるもんですから、その人たちをだいたい5年に一度沖縄県に招待をして大きなイベントを開催しています。2011年に第5回目をやりました（このインタビューの後、2016年に第6回が開催された）。
- AN じゃあ世界中に散らばった沖縄の人が集合するんですね。
- T 最近来るのは言葉ももうほとんど話せない三世、四世。で、その方々が最近はやっぱり沖縄文化に興味を持ち始めている。
- AN それはなぜなのでしょう？一世が来てからこれだけ時間がたってるわけじゃないですか。それが、なぜ三世、四世、五世が、今、もう一度沖縄に興味をもっているんですかね？
- T やはり根っこの部分を理解したいっていうのがあるんじゃないですかね。あとはやっぱり伝統芸能ですよ。まずきっかけになるのは。世界でも沖縄の旧盆で踊っているエイサーというのも世界中に広まっていますし。それをきっかけにして興味を持つということが、今の若い皆さんは多いんじゃないですかね。
- AN 子どもたちもそういうところから入っていくということでしょうか？
- N それと、相互交流の成果もあるのではないのでしょうか。嘉手納もそうですけど北谷町でも南米を中心に三世、四世の子どもたちを、3か月、4か月という限定された期間ではあるんですけども、沖縄のそれぞれの出身市町村に招待して、郷土の歴史だったり文化を学

習、体験してもらおう。そうすることによってその国の沖縄系社会の次の世代のリーダーになってもらう。そういう目論見もあって交流をしている。若い人の側にも、自分のルーツというものを探したい。おじいちゃん、ひいおじいちゃんはどこなところに住んでいたんだろうとか、関心がある。もちろんそのころと今ではいろいろ生活レベルとか生活の環境も違ってはいるんですけども、ルーツを見たいという欲求がある。血の中にはやっぱり受け継いでいるんですね。だからそういった子どもたちを呼んでその市町村で勉強させる。そうすると、ほんと三か月、四か月で三線を覚え、日本語も覚え、舞踊も一、二曲は踊れるようになって帰っていく。結構こういうことも影響があるのではないかなと思うわけです。そして、世界のウチナーンチュ大会、去年10月に開催されましたけど、今年は（2012年）ブラジルで若者の大会をやる。若者の大会、第1回をやる。それはブラジルだけじゃなくしてアルゼンチン、ペルーあちこちから集まって、若者だけでね、集まって沖縄文化、沖縄とのかかわりをつなげていこうという。こういう風に広がってきているんですよ。

AN 若者が中心になってきている・・・

T 最近はまだ若者がやっぱり中心になりつつありますね。

AN ほんとうに貴重なお話をありがとうございました。

観察、感想（中西亜弥子）

このインタビューは、沖縄の人からフェスティバルやハワイの沖縄文化がどうみえているか知りたくて実施した。その結果、貴重なお話を聞くことができた。私なりにまとめると以下ようになる。

(1) 沖縄の精神とは

真面目さ、忍耐強さ、ゆいまーる（相互扶助）、いちやりばちよーでー（出会えばみな兄弟）。これらの精神がオキナワン同士をつなげて、移民した当時の困難を乗り越えることができたのではないかと語っていた。またオキナワン同士がつながりを持ち続けるために豊かな文化が大きな役割を果たしたようである。

(2) なぜハワイで沖縄の文化がこれほど盛んになっているか

沖縄から離れたからこそ、ハワイで文化が特に大切に考えられていると感じたという。地元に住んでいるといつでも聞ける、触れられるものであるため、故郷から遠く離れたからこそ愛着が湧いたのではないかとおっしゃっていた。

(3) ハワイにおける沖縄文化の継承問題について

ここに来てまだ3日目だが、沖縄文化が途絶えてしまうかもしれないとか、廃れているという感じはしないとおっしゃっていた。むしろ文化が薄れるのを防ぐためにこのようなお祭りが開催されているのだろうと感じたという。

お二人のこのインタビューの回答は、ハワイのウチナーンチュと多く接している方ではなかったため推測で語られている部分が多かった。しかし、このインタビューによって、そもそも沖縄の人にとって文化がどれほど重要なものであるか、ということが理解できたように思う。困難を乗り越えるときに沖縄の精神、文化が人々をつなげるのに重要な役割を果たしたという推測は、実際に自分たちもそのような経験をしたからいえることなのではないだろうか。ハワイに移民してきた当時のオキナワンたちは、今の沖縄の人々と同じように、沖縄文化を通じて絆を深め、困難に立ち向か

っていったのではないかと思う。

6. まとめ～ボランティアにみられる民族文化主義

これまで、ボランティア（調査相手）各人と学生の問答、学生の感想を掲げ、筆者の補記、解説をその都度述べてきたが、ここで改めて、本稿の問題意識（ボランティアにみられる民族文化主義）に立ち返り、一応のまとめをしておきたい。

民族文化主義（エスノカルチュラリズム：ethnoculturalism）とは筆者の造語で、「エスニック・グループの人やその子孫はエスニック・アイデンティティ（民族的自覚、同胞意識）を確立し、エスニック文化（民族文化）の継承、発展に寄与すべきであるという考え方や主張」のことである（白水, 2018, 4）。これを沖縄系の人びと（ウチナーンチュに当てはめればウチナー文化主義（Uchinaculturalism）となり、「沖縄系の人やその子孫はウチナーンチュであるというエスニック・アイデンティティを確立し、沖縄文化の維持、発展に励むべきである」ということになる。いずれにせよ、この概念は二つの要件から成り立っている。定義の前半の「ウチナーンチュ・アイデンティティの確立」と、後半の「沖縄文化の継承、発展」である。

かつて筆者は、『海外ウチナーンチュ活動家の誕生：民族文化主義の実践』のなかで、沖縄系コミュニティの活動家（エスニック・リーダー、エスニック・エージェント）と目される人びとがウチナー文化主義の二つの要件を満たしながら精力的な活動を展開していることを明らかにした（白水, 2018）。

はたして、会場で働くボランティアの人びとにおいてもウチナー文化主義的イデオロギーはみられるだろうか。

まず、エスニック・アイデンティティの部分、すなわちウチナーンチュ・アイデンティティについて検討してみよう。近年、「オキナワンはジャパニーズではない。別のエスニック・カテゴリーだ」といった言説が行われるようになった。学生インタビューのなかの「オキナワンはジャパニーズなのか、それとも別のエスニック・グループなのか」という設問に対し、「オキナワンはジャパニーズとは別のエスニック・グループだ」と回答した、いわば「[非日系型=オキナワン・アイデンティティ型]は約5割という結果になった。いっぽう、ジャパニーズ、どちらかといえばジャパニーズという「日系型=日系人アイデンティティ型」は合計で約3割だった。また、ジャパニーズでもありオキナワンでもある、さらにアメリカンでもある「共在型=多アイデンティティ共在型」は1割強であった。

先に掲げたウチナーンチュ活動家（エスニック・エージェント、エスニック・リーダー）に対するインタビューでは（白水, 2018, 96-233）多くのひとが「日系型」といってもよい立場を表明したのに対し、「非日系型」は少数であった。いっぽう、「多アイデンティティ共在型」は日系型とならんで多くのひとが表明した。筆者がインタビュアーとして得た感触によれば、ホンネのレベルでは、「共在型」が最も多いと思われる。これを踏まえれば、学生によるボランティア対象調査も、より時間をかけて掘り下げることができれば「多アイデンティティ共在型」がもっと多くなったのではないか。そうした視点での指導が足りなかったことが悔やまれる。ともあれ、1970年代までは

ほとんどの人が自分はジャパニーズだと思っていたはずだから、大きな変化が生じていることは確かかなようだ。

このように、エスニック・アイデンティティに関してはボランティアにおいてもウチナーンチュ・アイデンティティの確立は徐々に進行しつつあるといえよう。では民族文化主義のもう一つの要件であるエスニック文化の維持、継承への思いはどうか。

調査相手（ボランティア）のほとんどがウチナーンチュ・スピリットとして協力・協働・相互扶助を挙げた。こうした社会関係に関する徳目の背景にあり、その精神である友情・隣人愛・博愛・寛容についての回答を合わせれば全回答の約8割を占める。寄せられた回答27のほとんどが、HUOAの歴代会長たちが標語に掲げてきたウチナーグチによる金言・徳目とよく一致する。回答者が年配の会員たちが中心とはいえ、かれらは一致して、助け合いの心、分かち合いの心がウチナーンチュたる精神なのだと思っているということがわかる貴重な証拠である。

こうしたウチナーンチュ精神の根源になっている徳目に加え、歌舞音曲等の芸能や武術、家族愛・先祖供養、沖縄料理といったものがハワイのウチナーンチュ、とりわけボランティアにとっての沖縄文化の核心的な部分であることがわかるし、かなりの程度理解していると考えてよい。では、これら沖縄文化の維持、発展に「励まなければならない」とする「べき論」（当為）の部分はどうか。この点に関しては、インタビューの質問（14）の「今後の問題点、心配な点」に関する回答が参考になる。先に見たように、回答者の実に8割が、今後の（次の世代の）文化の維持継承に不安を持っていた。すなわち、沖縄文化を維持発展すべだと思っているからこそ、現状を見て、先行きを心配しているのだ。

以上みてきたように、ボランティアたちもその多くがウチナー文化主義すなわち民族文化主義の意識的または無意識的な同調者であり実践者であることがわかる。

7. 〈付録〉 半構造的質問紙

学生とともに作成した半構造的質問紙を以下に掲げる。学生たちは、この質問紙を基本にして面接調査を実施した。質問をした際うまく通じない場合は、文意を損なわない程度で、言い換えたり、いくつかの設問をまとめて質問してもよいことにした。

Questionnaires for Uchinanchu Volunteers 2012

Interviewer's name ()

Date Sept. / 2012

Q1 **How many times** have you **attended** this festival? ()

If more than twice: **When was the first time?** ()

Q2 What do you **look forward to** this festival? What is your **favorite part** of the festival?

Q3 What is **Uchinanchu spirit** in your opinion?

Q4 **What is the most important thing** in the Uchinanchu culture?

For example, Uchinaguchi? Okinawan food? Okinawan dance? Music? or

Q5 Would you say that **Okinawans** are **ethnically Japanese** or do they belong to their **own ethnic group**?

Q6 From your point of view, **what are the outstanding or pending problems** in Hawaii's **Okinawan** community?

FS1. May I have **your name** please? ()

FS2. May I ask **your year of birth** please? ()

FS3. Are you an **Okinawan descendant**? ()

If No, **where were your ancestors from?** ()

FS4. **What generation** are you? Nisei? Sansei? ()

FS5. **Which Club** do you **belong to**? ()

FS6 May I ask your **occupation**?

If retired: **what was your occupation?** ()

Thank you very much for your time and cooperation.